

6	A + C (D)	21/51 (41%)	6/51 (12%)	24/51 (47%)
7	B + C (D)	0	4/12 (33%)	8/12 (67%)
AならびにB以下の 方式を経験した人の 支持率	4, 5, 6の 総括	30/97 (31%)	67/97 (69%)	

従来の方式と新方式を体験した人達の結果の総括から新方式は強く支持されていることが分かる。

5. 回答者の意見から

回答者の意見で主なものは次のようであった。

- 1) 新方式を円滑に実施できるように講演のグループ化に努力する。
- 2) 新方式を効果的に実施するために討論時間を長くする。
- 3) そのために休憩時間を増加することもよい。
- 4) 新方式 (B, C, D) で行なうと希望する講演を聴けないことがある。
- 5) あらかじめ座長と講演者との十分なコンセンサスを得ることが必要である。

6. ま と め

アンケートの回収率は必ずしも高くなかったが、この結果から、今春の講演大会で実施した新しい運営方式が支持されましたので、今後も座長の裁量により A, B, C, D のいずれか方法を選定し、あらかじめ講演者に連絡のうえこれを実施してゆくことといたします。

ご承知の通り、講演数は年々増加する傾向にありますが、一方では十分な講演会場の確保や講演会開催期間の延長が困難であること等の事情もありまして、一般講演の討論時間を十分とり難い状況となっておりますが、講演プログラム編成にあたり、同類講演のグループ化等に努力いたしまして、講演と討論の内容が充実できるよう、今後ともひきつづき改善をはかりたいと考えておりますので、今後ともご協力、ご支援をお願いいたしたく存じます。

また、今回のアンケートにご回答下さいました方々に厚くお礼申し上げます。

(日本鉄鋼協会編集委員会講演大会分科会主査 安 藤 卓 雄)

(協会記事 N144 ページよりつづく)

④ 破壊力学・フラクトグラフィー

神 鋼 酒井 忠迪

⑤ 炭化物などの異相の影響

東工大 中村 正久

(4) テキスト：部会報告書を使用する。

(1) E S W の化学反応とフラックスの性質

(2) E S W の物理現象

(3) E S W 溶接部の機械的性質

(4) E S W の調査と国際的規格を作る。

特 殊 製 練 部 会

第1回第5分科会 開催日：6月3日。出席者：後藤部会長、小林主査、ほか 14 名。

1. 今まで活動を停止していたが、今年度から活発に活動することになり、後藤部会長、小林主査から部会、分科会についての説明が行われた。

2. 当分科会は ESR とエレクトロスラグ溶接 (ESW) の比較に関する研究をすることになっているが、最初のうちは E S W そのものを追求していくほうがよいという意見が多く、その方向で進むことになった。

3. 物理化学を根定においた研究をしてもらいたいという要望が部会長から出された。それを受けて研究目標をつぎのように分類した。

鉄鋼科学技術史委員会

第8回委員会 開催日：5月13日。出席者：館委員長ほか 12 名。

本委員会の前に、旧東大・土木工学科の奥村敏恵氏に高抗張力鋼の歴史について、実際の使用例及び事故例などを含む特別講演を受けた。

本委員会では材料、製鋼、教育の各 W.G の活動報告があつた。

今度材料の荒木主査が東大から金材技研の所長になられたことから主査を辞退されることになった。

今後各 W.Q の活動をさらに円滑にするためかねてからの懸案事項であつた W.G の幹事として製鋼、材料の W.G について依購者を決定した